

正法眼藏説心説性

Text based on 河村孝道, 道元禪師全集 1:449-456; revised to traditional 漢字

{449} 正法眼藏第四十二説心説性

神山僧密禪師、與洞山悟本大師行次、悟本大師、指傍院曰、裏面有人説心説性。僧密師伯曰、是誰。悟本大師曰、被師伯一問、直得去死十分。僧密師伯曰、説心説性底誰。悟本大師曰、死中得活。

説心説性は、佛道の大本なり、これより佛佛祖祖を現成せしむるなり。説心説性にあらざれば、轉妙法輪することなし、發心修行することなし、大地有情同時成道することなし、一切衆生無佛性することなし。拈華瞬目は説心説性なり、破顔微笑は説心説性なり、禮拜依位而立は説心説性なり、祖師入梁は説心説性なり、夜半{450}傳衣は説心説性なり、拈拄杖これ説心説性なり、横拂子これ説心説性なり。

おほよそ佛佛祖祖のあらゆる功德は、ことごとくこれ説心説性なり。平常の説心説性あり、牆壁瓦礫の説心説性あり。いはゆる、心生種種法生の道理現成し、心滅種種法滅の道理現成する、しかしながら心の説なる時節なり、性の説なる時節なり。

しかあるに、心を通ぜず、性に達せざる庸流、くらくして説心説性をしらず、談玄談妙をしらず、佛祖の道にあるべからざるといひ、あるべからざるとをしふ。説心説性を説心説性としらざるによりて、説心説性を説心説性とおもふなり。これことに大道の通塞を批判せざるによりてなり。

後來、徑山大慧禪師宗杲といふありていはく、いまのともがら、説心説性をこのみ、談玄談妙をこのむによりて、得道おそし。ただまさに心性ふたつながらなげすてきたり、玄妙ともに忘じきたりて、二相不生のとき、證契するなり。

この道取、いまだ佛祖の 縑緇 をしらず、佛祖の列辟をきかざるなり。これによりて、心はひとへに慮知念覺なりとしりて、慮知念覺も心なることを學せざるによりて、かくのごとくいふ。性は澄湛寂靜なるとのみ妄計して、佛性法性の有無をしらず、如是性をゆめにもいまだみざるによりて、しかのごとく佛法を辟見せるなり。佛祖の道取する心は皮肉骨髓なり、佛祖の保任せる性は竹篋拄杖なり。佛祖の證契する玄は露柱燈籠なり、佛祖の舉拈する妙は知見解會なり。

{451}佛祖の、眞實に佛祖なるは、はじめよりこの心性を聴取し、説取し、行取し、證取するなり。この玄妙を保任取し、參學取するなり。かくのごとくなるを學佛祖の児孫といふ。しかのごとくにあらざれば學道にあらず。

このゆゑに、得道の得道せず、不得道のとき不得道ならざるなり。得不の時節、ともに蹉過するなり。たとひなんぢがいふがごとく、心性ふたつながら亡ずといふは、心の説あらしむる分なり、百千萬億分の少分なり。玄妙ともになげすてきたるといふ、談玄の談ならしむる分なり。この関楨子を學せず、おろかに、亡ず、といはば、手をはなれんとおもひ、身にのがれぬるとしれり。いまだ小乗の局量を解脱せざるなり、いかでか大乘の奥玄におよぼん、いかにいはんや向上の関楨子をしらんや。佛祖の茶飯を喫しきたれるといひがたし。

參師勤恪するは、ただ説心説性を身心の正當恁麼時に體究するなり、身先身後に參究するなり、さらに二三のことなることなし。

爾時初祖、謂二祖曰、汝但外息諸縁、内心無喘、心如牆壁、可以入道。二祖種種説心説性、俱不證契。一日忽然省得。果白初祖曰、弟子此回始息諸縁也。初祖知其已悟、更不窮詰、只曰、莫成斷滅否。二祖曰、無。初祖曰、子作麼生。二祖曰、了了常知、故言之不可及。初祖曰、此乃從上諸佛諸祖所傳心體、汝今既得、善自護持。

{452}この因縁、疑著するものあり、舉拈するあり。二祖の初祖に參侍せし因縁のなかの一因縁、かくのごとし。二祖しきりに説心説性

するに、はじめは相契せず。やうやく積功累徳して、つひに初祖の道を得道しき。庸愚おもふらくは、二祖はじめに説心説性せしときは證契せず、そのとが、説心説性するにあり、のちには説心説性をすてて證契せり、とおもへり。心如牆壁可以入道の道を參徹せざるによりて、かくのごとくいふなり。これことに學道の區別にくらし。

ゆゑいかんとなれば、菩提心をおこし、佛道修行におもむくのちよりは、難行をねんごろにおこなふとき、おこなふといへども、百行に一當なし。しかあれども、或從知識・或從經卷して、やうやくあたることをうるなり。いまの一當は、むかしの百不當のちからなり、百不當の一老なり。聞教・修道・得證、みなかくのごとし。きのふの説心説性は百不當なりといへども、きのふの説心説性の百不當、たちまち{453}に今日の一當なり。行佛道の初心のとき、未練にして通達せざればとて、佛道をすてて餘道をへて佛道をうることなし。佛道修行の始終に達せざるともがら、この通塞の道理なることをあきらめがたし。

佛道は、初發心のときも佛道なり、成正覺のときも佛道なり、初中後ともに佛道なり。たとへば、萬里をゆくものの、一步も千里のうちなり、千歩も千里のうちなり。初一步と千歩とことなれども、千里のおなじきがごとし。しかあるを、至愚のともがらはおもふらく、學佛道の時は佛道にいたらず、果上のときのみ佛道なり、と。擧道行道をしらず、擧道行道をしらず、擧道證道をしらざるによりてかくのごとし。迷人のみ佛道修行して大悟すと學して、不迷人も佛道修行して大悟すとしらずきかざるともがら、かくのごとくいふなり。

證契よりさきの説心説性は、佛道なりといへども、説心説性して證契するなり。證契は、迷者のはじめて大悟するをのみ證契といふ、と參學すべからず。迷者も大悟し、悟者も大悟し、不悟者も大悟し、不迷者も大悟し、證契者も證契するなり。

しかあれば、説心説性は、佛道の正直なり。杲公、この道理に達せず、説心説性すべからず、といふ、佛法の道理にあらず。いまの大宋國には、杲公におよべるもなし。

高祖悟本大師、ひとり諸祖のなかの尊として、説心説性の、説心説性なる道理に通達せり。いまだ通達せざる諸方の祖師、いまの因縁のごとくなる道取なし。

{454}いはゆる僧密師伯と大師と行次に、傍院をさしていはく、裏面有人、説心説性。

この道取は、高祖出世よりこのかた、法孫かならず祖風を正傳せり、餘門の、夢にも見聞せるところにあらず、いはんや夢にも領覽の方をしらんや。ただ嫡嗣たるもの、正傳せり。この道理、もし正傳せざらんは、いかでか佛道に達本ならん。いはゆるいまの道理は、或裏或面、有人人有、説心説性なり。面裏心説、面裏性説なり。これを參究功夫すべし。性にあらざる説、いまになし、説にあらざる心、いまだあらず。

佛性といふは、一切の説なり、無佛性といふは、一切の説なり。佛性の性なることを參學すといふとも、有佛性を參學せざらんは學道にあらず、無佛性を參學せざらんは參學にあらず。説の性なることを參學する、これ佛祖の嫡孫なり。性は説なることを信受する、これ嫡孫の佛祖なり。

心は疎動し、性は恬靜なりと道取するは外道の見なり。性は澄湛にして、相は遷移すると道取するは外道の見なり。佛道の學心學性しかあらず、佛道の行心行性は、外道にひとしからず、佛道の明心明性は、外道その分あるべからず。

佛道には、有人の説心説性あり、無人の説心説性あり、有人の不説心不説性あり、無人の不説心不説性あり、説心未説心、説性未説性あり。無人のときの説心を學せざれば、説心未到田地なり。有人のときの説心を學せざれば、説心未到田地なり。{455}説心無人を學し、無人説心を學し、説心是人を學し、是人説心を學するなり。

臨濟の道取する盡力は、わづかに無位真人なりといへども、有位真人をいまだ道取せず。のこれる參學、のこれる道取、いまだ現成せ

ず、未到參徹地といふべし。説心説性は説佛説祖なるがゆゑに、耳處に相見し、眼處に相見すべし。

ちなみに僧密師伯いはく、是誰。

この道取を現成せしむるに、僧密師伯、さきにもこの道取に乗ずべし、のちにもこの道取に乗ずべし。是誰は、那裏の説心説性なり。しかあれば、是誰と道取せられんとき、是誰と思量取せられんときは、すなはち説心説性なり。この説心説性は、餘方のともがら、かつてしらざるところなり。子をわすれて賊とするゆゑに、賊を認じて子とするなり。

大師いはく、被師伯一問、直得去死十分。

この道をきく參學の庸流おほくおもふ、説心説性する有人の、是誰といはれて、直得去死十分なるべし。そのゆゑは、是誰のことば、對面不相識なり、全無所見なるがゆゑに死句なるべし。かならずしもしかにはあらず。この説心説性は、徹者まれなりぬべし。十分の去死は一二分の去死にあらず、このゆゑに去死の十分なり。被問の正當恁麼時、たれかこれを遮天蓋地にあらずとせん。照古也際斷なるべし、照今也際斷なるべし、照來也際斷なるべし、{456}照正當恁麼時也際斷なるべし。

僧密師伯いはく、説心説性底誰。

さきの是誰といまの是誰と、その名は張三なりとも、その人は李四なり。

大師いはく、死中得活。

この死中は、直得去死を直指すとおもひ、説心説性底を直指して是誰とは、みだりに道取するにあらず。是誰は説心説性の有人を差排す、かならず十分の去死を萬期せずといふと、參學することありぬべし。大師道の死中得活は、有人説心説性の聲色現前なり、またさ

らに、十分の去死のなかの一兩分なるべし。活は、たとひ全活なりとも、死の變じて活と現ずるにあらず。得活の頭正尾正に脱落なるのみなり。

おほよそ佛道祖道には、かくのごとくの説心説性ありて、參究せらるるなり。又且のときは十分の死を死して、得活の活計を現成するなり。

しるべし、唐代より今日にいたるまで、説心説性の、佛道なることをあきらめず、教行証の説心説性にくらくて、胡説乱道する可憐憫者おほし。身先身後にすくふべし。爲道すらくは、説心説性はこれ七佛祖師の要機なり。

正法眼藏説心説性第四十二

爾時寛元元年癸卯在于日本國越州吉田県懸吉峯寺示衆